



県立三好病院

平成25年3月・4月号

今の特集：赤ちゃんの予防接種



小児科外来 スタッフ です

～ 県立病院事業基本理念 ～
県民に支えられた病院として
県民医療の最後の砦となる

発行 徳島県立三好病院 広報委員会
〒778-8503 徳島県三好市池田町シマ815-2
TEL 0883-72-1131 FAX 0883-72-6910
HP <http://www.tph.gr.jp/miyoshi/>

臨時看護師募集

県立三好病院では臨時看護師、
臨時准看護師を随時募集して
います。
詳しくは県立三好病院看護局
(0883-72-1131) まで



赤ちゃんの予防接種

小児科 坂本 不二夫

はじめに

以前は子供の予防接種は市町村が直接実施していましたが、最近は医療機関に委託する形で病院が行うようになりました。したがって三好病院小児科でも予防接種を受けることができます。ここ数年で赤ちゃん(1歳未満)のうちに受けることを勧められている予防接種が増えていきますので、今回は生後2カ月から3歳頃までに受けることができる予防接種についてまとめてみたいと思います。

生後6カ月までに受けることができるワクチン



1) ヒブワクチンと肺炎球菌ワクチン

ヒブ(インフルエンザ桿菌)と肺炎球菌は1歳未満の赤ちゃんが罹りやすい重篤な感染症である化膿性髄膜炎や敗血症の原因として重要な細菌です。これらの感染を予防するために早い時期に接種することが勧められており、生後2カ月を過ぎると受けることができます。4~8週間の間隔で3回、1歳を過ぎてからの追加接種1回の合計4回が原則です。

現時点ではこの2つの予防接種は定期接種でなく、家族の希望による任意接種ということになっています。したがって無理に受ける必要はないのですが、多くの市町村では定期接種と同じように無料で受けることができるので、実質的には定期接種になっている状態です。

三好病院では**原則として2種類以上のワクチンの同時接種はしていません**が、スケジュールの都合でどうしても期間内に接種できない場合、ヒブワクチンと肺炎球菌ワクチンの同時接種なら受け付けています。

2) 四種混合ワクチン

従来はDPT三種混合ワクチン(ジフテリア・百日咳・破傷風)とポリオ(小児まひ)の生ワクチンが定期接種になっていましたが、昨年からはポリオワクチンが生ワクチン(口から飲む)から不活化ワクチン(注射)に変更されました。現在はこの4種類のワクチンを混合した四種混合ワクチンが発売されています。3カ月を過ぎたら受けることができ、従来の三種混合と同じように4~8週の間隔で3回、その1年後に1回の合計4回接種します。なお三種混合ワクチンとポリオ不活化ワクチンを別々に受けることもできます。

ジフテリアとポリオは国内で発生することはほとんどありません。また子供の百日咳も非常に珍しくなっています。これは「ワクチンが普及しているから」と考えてよいと思います。受けておいた方がよい予防接種です。

3) BCGワクチン

従来はツベルクリン反応の検査をしてその陰性者に接種されていましたが、現在は生後3カ月~6カ月の赤ちゃんにツベルクリン反応なしで接種しています。BCGは年齢の低い子供が罹りやすい結核性髄膜炎や粟粒結核に対する予防効果があると言われており、最

近は早い時期の接種が重要視されています。これも受けておいた方がよいでしょう。

ワクチンを接種してから1週間以上経つと接種部位(18カ所)が赤くなってきます。わずかに赤くなる程度から化膿してかさぶたを作るまで反応には個人差がありますが、普通は治療が必要になることはありません。

従来のツベルクリン反応で陽性になる子供の場合はBCGを接種してから2~3日後という早い時期に接種部位が赤くなってきます。この場合は結核の自然感染が起こった可能性があるため、病院を受診した方がよいでしょう。逆に1カ月以上経っても接種部位にまったく何の変化もない場合は再接種が必要かどうか医療機関で相談して下さい。

4) ロタウイルスワクチンとB型肝炎ワクチン

冬季に嘔吐下痢症の原因となるロタウイルスの感染を予防するロタウイルスワクチン、B型肝炎ウイルスの感染を予防するB型肝炎ワクチンを定期接種にしようという動きがあります。ロタウイルスワクチンは経口、B型肝炎ワクチンは注射です。現在も任意接種として可能ですが、生後6カ月までにしなければならない予防接種があまりにも多くなるということで異論もあるようです。三好病院も今のところ取り扱っていません。

1歳を過ぎたら受けることができるワクチン



5) MRワクチン

麻疹(はしか)と風疹(三日ばしか)の混合ワクチンです。従来の定期接種の場合は麻疹ワクチンが1回、風疹ワクチンが女兒(中学生)のみ1回でしたが、現在は性別に関係なく1歳以後に1回目、小学校入学前に2回目を接種します。

昔は誰でも一度は経験する病気であった麻疹も今では小児科医でもほとんど見る事がなくなりました。風疹も同様の経過をたどりつつあります。予防接種の効果は明らかであり、最もお勧めするワクチンです。

6) おたふくかぜワクチンと水痘ワクチン

ともに任意接種です。1回の接種で免疫が得られますが、効果がどれくらい持続するかは十分に分かりません。水痘もおたふくかぜも普通の経過を取った場合は特に重篤な病気とは言えないので、接種するかどうかは個人の判断で決めてよいと思います。三好病院でも受けることができます。

7) インフルエンザワクチン

生後6カ月から接種が可能ですが、1歳を過ぎてから受けた方が無難でしょう。1~4週間の間隔で2回受けます。その年によって流行するウイルス株が異なるので、毎年受けなければならないという欠点があります。

効果に関してはいろいろな意見がありますが、発病を阻止できないことは確かでしょう。

最後に

以上、3歳頃までに問題となる予防接種を紹介しました。両親や家族にとって心配なのは副作用の問題でしょう。ここに登場したワクチンによる重篤な副作用はわずかですが、どうしても心配な場合は医師と十分に相談してから決めればよいと思います。

薬剤科は、チーム医療の一員として、地域に根ざした患者サービスを提供することを業務理念とし、薬剤師8名、看護師1名、SPD（薬品管理業務担当）2名で薬剤業務を行っています。薬は患者さんの病気を治療する上で大変重要なものですが、適正に使用されなければ不利益な影響を及ぼすこともあります。今回は薬の適正使用のために、薬剤師が行っている主な業務を紹介させていただきます。

まず調剤室では、主に入院患者さんの薬を調剤しています。処方箋上の薬品名、用法用量、飲み合わせ等

をチェックし、必要があれば医師に確認を行った後調剤を行います。さらに、患者さんのニーズに応じてお薬の一包化や粉碎も行っています。調剤したお薬は、患者さんの手元に正確に届けるため、調剤者と異なる者が確認（監査）を行い、お渡しするようにしています。また注射薬を取りそろえる際には、混ぜるよう指示されている薬同士が本当に混ぜても問題ないか等の確認はもちろん、抗がん剤では、患者さん一人ひとりの体表面積や臨床検査値に見合った量が、適切な日数と間隔で処方されているかを確認しています。薬の中には、体内の薬の濃度が十分に高くなければ効果が現れず、逆に高すぎると副作用が現れやすい薬があります。このような薬の適切な投与量・投与間隔を予測し、その結果を医師に報告する仕事も行っています。また、食事が出来ない患者さんには輸液による栄養補給が行われますが、長時間血管内投与しても細菌等の汚染がないようにクリーンベンチ（清浄化された空気が送風されて清浄な環境を保つ作業台）の中で予め滅菌された器具を用いて無菌的に調製しています。

病棟では、入院患者さんに薬の必要性や医師の指示通りに服用することの大切さを理解していただくために、服薬指導を行っています。また患者さんとの会話の中で、病気や薬、副作用に対する不安や悩みを把握し、適切な情報提供ができるよう努めています。この他にも、インスリン自己注射や自己血糖測定器、喘息患者さんの吸入薬などの使い方も指導しています。

このように、薬剤師は薬を提供することはもちろん、その薬を適正に使用していただくために様々な業務を行っています。今後もより質の高い医療サービスを提供できるよう取り組んで参ります。



薬剤科スタッフ

**御意見・御要望がございましたら、ホームページ、または院内御意見箱まで
お願いします。広報バックナンバーは、ホームページにて御覧になれます。**